

マスターズを彩るレジェンドたち(33)

春の4月。いよいよ万物が生き生きと動き出す季節だ。マスターズ陸上の大会も地域によっては始まるころも。早く好記録誕生のニュースが聞きたいものだ。今月のレジェンドは岩手のM70クラスの棒高跳・三宅清房さんと、W95クラスの短距離・早川武子さんにご登場をいただいた。お二人の2024年度の活躍の跡を紹介。

写真提供／岩手マスターズ

三宅清房さん(70歳・岩手) シーズン3度の日本新は M70・棒高跳

70歳の三宅清房さんが岩手マスターズの情報誌『Your Only Life Once』(ヨロ=あなたの一度きりの人生)の9号2025の表紙を飾った。棒高跳の掲示板に手をやり、ポールを肩に写真に納まった三宅さん。

掲示板の数字は「3m30」だ。M70クラスの公認記録3m00を30cmも上回る日本新だ。三宅さんが素晴らしい記録をつくったのは2024年8月24日、地元岩手のウェスタンデジタルスタジアムきたかみの競技場ピット。この日、3m10から挑んだ。3回目に成功した後、3m30にバーを上げ、こちらも最後の試技で成功させた。

三宅さんは「よく跳べたな、と自分でもびっくりです。まさか、2000年に東京の小林末雄さんが越えていた3m00を更新できたとは」と感慨深げ。

ケガに悩まされたシーズンだったが、三宅さんは6月の関東マスターズ選手権で3m10、8月初めの東北マスターズ選手権で3m20をクリア。ここまで2度日本新を樹立した後、北上市の地で“最高の喜び”に浸った。

三宅さんがマスターズ入りしたのは35歳のとき。以後、活動してきた。マスターズへ入ったのは青春時代の情熱が心の中で燃え続けていたからだ。三宅さんがポールを握ったのは、岩手県内では文武両道で知られる黒沢尻北高の1年生からだ。

中学校はといえば父親の仕事の都合上、新潟県内だった。三宅さんが中学



M70 棒高跳 日本新の記録掲示を前に写真に納まる三宅さん

生の頃から始めたかったのは武道だった。だが、その中学校は剣道や柔道の部活はなく、そこで陸上部へ。陸上も棒高跳がなく、ハードルなどに汗を流した。

父親の転勤に伴い岩手へ移ったのが中3で。高校では本格的に棒高跳に取り組んだが、初めは竹のポールから始め、高1の秋からグラスファイバーを握った。高1で3m10、高2で3m90まで上げた。さらに高3で4m20の岩手高校新をマーク。樹立したのは1972年の鹿児島国体だ。クリアしたのは予選での試技。決勝では失敗して入賞できなかった。

卒業後は中大へ進学。一般学生で陸上部に入部するも、1年で退部した。以後、大学時代はスポーツから離れていたが、地元の市役所に勤務するようになると、業務の傍ら陸上を再開するとともに、他のスポーツや趣味も始めた。

若い頃やりたかった剣道は4段へ。スキーは1級に。このほか、岩手マス

ターズ事務局長の高橋紀子さんの話によると「岩手では郷土芸能で鬼の面をつけて舞う鬼剣舞が盛んなんです。三宅さんはその鬼の面づくりが上手なんです」と。

陸上に話を戻し、棒高跳の記録について。マスターズに入会した35歳で4m50と、高校生での高さを上回り、M40クラスで4m20に。仕事が多忙となったM45クラスでは3m80まで記録が落ちた。このクラスではかつて日本の一線級として鳴らした高根沢威夫さんが4m40の日本記録を跳んでおり、三宅さんは遠く及ばなかった。

懐かしい思い出としては、2004年に鹿児島であった第25回全日本マスターズ大会だ。三宅さんは50歳。M50クラスで4m01の日本記録で優勝を遂げた。思い返すと高校生のとき、鹿児島国体で4m20の岩手高校記録を出した場所だ。何と懐かしい縁だろうと感じた。

もう一つは14年に岩手・北上での第35回全日本とアジアの大会を兼ね

たイベントだ。三宅さんはM60クラスで3m40を跳んで地元Vを飾った。「市役所勤務の三宅さんは試合とは別に、大会運営を担当されていて、いろいろと助けていただきました」とは高橋さんの話。

さらに「三宅さんの影響で岩手マスタース会員の間では、棒高跳志向が高まって」と高橋さんは続けた。このように三宅さんは岩手マスタースにとって、特異な存在だ。子息の怜さんも棒高跳をやり、28歳の23年度に4m92を跳び東北マスタース記録を樹立。M25クラス全国ランキングの1位に。

2024年度岩手マスタース選手権の最優秀選手賞を獲得している三宅さんは、「今後も情熱が尽きるまで棒高跳の記録を追いつけたい」と話している。

早川武子さん(96歳・岩手) 年齢に負けず24年も走った

2024年8月3、4日に宮城県で行われた第40回東北マスタース陸上の女子100m。静かに見守っていた観客席のファンから歓声が上がった。歓声を背に懸命に走った早川武子さんが笑顔を決め、ゴール。スタンドからは拍手、また拍手。早川さんは96歳。ここ数年、東北マスタースや岩手マスタースの大会に「勇姿」を見せるたびに大人気。皆さんのアイドルになっているのだ。

タイムの発表。33秒87(+0.4)だ。この後がW95クラスの60m。疲れも見せずに走り出した。やがてゴール、なのだが、そのまま走り続けた。このパワーには見ている者をびっくりさせ、このレースも拍手と歓声が波打った。

ひと息つくとも参加者の皆さんが早川さんを囲み、記念撮影だ。60mのタイムは18秒86(-0.3)だった。記念撮影の一こまは岩手マスタースの情報誌『ヨロ』9号の東北マスタース陸上の報道ページを飾っている。

岩手マスタース陸上の頂上決戦は東北マスタース陸上の後、8月24日にウエスタンデジタルスタジアムきたか



マスタース界のアイドル早川さんは、東北マスタースで出場女子選手と記念撮影

みで開始され、早川さんもW95クラスの60mと100mに参加した。

同競技会では真夏の暑さを考え、ドリンクやゼリーなどを準備し、熱中症対策をしっかりと取って行われた。当日の熱戦の様子は地元の岩手めんこいテレビで報道された。

女子最高齢者賞が贈られた早川さんは、60m、100mとも東北マスタースでのタイムよりは劣ったが、元気に1日を過ごした。早川さんの健闘の跡は2024年4月号のマスタースのページでも紹介したが、ここ数年の記録をみると――。

22年、94歳でW90クラスの60mは20秒03、100mが30秒00だ。1年後のW95クラスでは60m18秒13、100m30秒77である。100mの記録が一年、一年落ちているのは仕方ないこと。

早川さんは、20年に92歳でマスタース陸上入り。入会のきっかけは60歳を過ぎてシルバースポーツに入り、地域の運動会で速かったから、とお孫さんがマスタースへ登録したのだ。

幼少の頃の早川さんは丈夫な体ではなく、小学校に通うようになって「安静にして療養を要す」と通信簿に書かれていたほど。が、シルバースポーツに入会した頃には丈夫な体に変身していたそう。

早川さんは岩手県一関市に住んでいるが、母親の応援者である次女の小野寺由希子さん(65歳)は宮城県気仙沼市に住んでいる。母親の武子さんは時折、由希子さん宅を訪れている。

高校生まで短距離選手だった由希さんは、母親のよき理解者で、いろいろとサポートしている。年齢が高くなれば朝は早く目が覚める、とされるが早川さんは「夜は目が堅く、10時過ぎに床に就き、朝はゆっくりで8時過ぎに起きますかね」とは由希子さんの話。

食べるもので好きなのは、とうもろこしか、やきいも。食事のおかずは好き嫌いなし。走ることのほか、趣味については、若い頃は「読書、またはクイズによく取り組んでいた」(由希子さんの話)。では、高齢者になってからは、といえば家での菜園とか。

そう聞けば「静かな」武子さんと思えるが、民謡が好きで尺八や三味線の音に魅せられ、実家から月2回、その関係の教室に通っている。車で片道1時間はかかるそう。

母親・武子さんの「自慢ののど」は民謡で岩手、宮城で広く歌われている『さんさ時雨』だ。武子さんには10人の孫、13人のひ孫がおり、1月に最後のお孫さんが結婚した。その結婚式場で自慢の声を披露したのだ。

この民謡は仙台藩が戦に勝ったときに歌われたと伝えられている。武子さんが歌い終わったときには列席者の拍手に次ぐ拍手で大いに盛り上がったという。武子さんには100mを走り切ったときと同じく、すがすがしい気分だったろう。

5月で97歳になるが、いつまでも元気で、アイドルのまま過ごしてほしい。